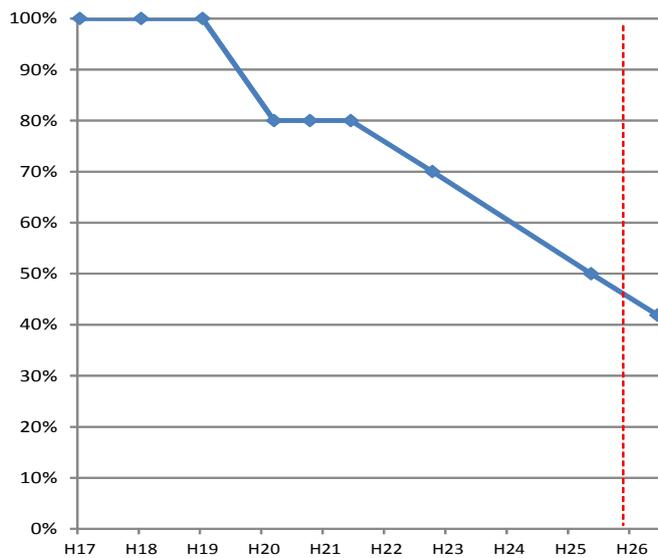


樹種名	アオダモ (別名: コバノトネリコ、ケアオダモ)		
科 目	モクセイ科		
学 名	<i>Fraxinus lanuginosa</i>		
分 布	日本では北海道から九州までの山地に広く分布しており、南千島や国外では朝鮮半島にも自生している。		
樹木特性	陽樹であり低山帯の湿り気のある川沿いや湖畔などの水分条件の良い比較的肥沃な場所に生育する。 伐採すると切り株から萌芽する。萌芽発生本数が最大となるような切り株直径は約20 cm前後で萌芽本数は少なく5本程度である。		
用 途	器具材として利用。 特に野球用のバットの材料として利用。 街路樹や公園木として植樹されることも多い。		
植栽本数 (植栽密度)	31本 (他樹種との混植)		
特 徴	<p>【樹形】 落葉高木で樹高は10~15m、太さは50cm程になるが成長は遅い。成熟した木の樹皮には地衣類が付着し白い斑点模様ができる。</p> <p>葉は奇数羽状複葉で、3~7枚の小葉が対生する。小葉は10~15cmほどで淡緑色、周囲は波状小鋸歯がある。花は春に咲き、円錐花序の白い5~6mmの小花を多数つける。秋には果実が成熟する。長さ2~4cm、幅3~5mmほど、膜状の羽根を持つ翼果(よっか)で風を利用し遠くまで飛ばす。材質は堅く粘りがある。そのため曲げることができ、このような特質を生かしてさまざまな用途で使われている。</p>		
試験地での様子	ポット苗を植栽し、植栽後3年目から環境が要因と思われる枯死が発生した。		
被 害	特になし。		

## アオダモ 現存率



## 【現存率】

植栽後、3年を経過した時点で枯死が発生した。その後2年間は順調に生育していたが、9年を経過した時点で半数以上の個体が枯死しており、枯死の原因は特定できていない。

平成26年度に毎木調査を実施した結果、現存率は41.9%であった。

※ 赤線は、選定した調査木から毎木調査へと測定方法を変更したため、データの連続性はない。

## 【根元・胸高直径】

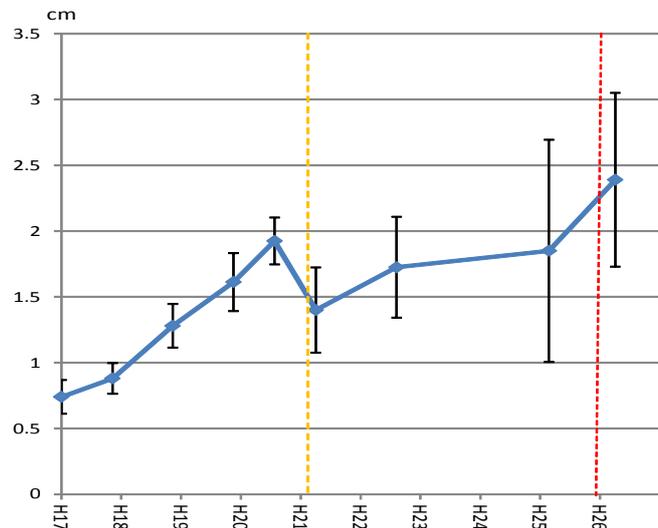
胸高直径は細いながらも、順調に成長している。

平成26年度に毎木調査を実施した結果、平均胸高直径は2.39cmであった。

※ 赤線は、選定した調査木から毎木調査へと測定方法を変更したため、データの連続性はない。

※ オレンジ線は、根元から胸高へと測定箇所変更のため、データの連続性はない。

## アオダモ 根元・胸高直径



## 【樹高】

樹高は低いが、順調に成長している。

平成26年度に毎木調査を実施した結果、平均樹高は3.47mであった。

※ 赤線は、選定した調査木から毎木調査へと測定方法を変更したため、データの連続性はない。

## 《プチ情報》

アオダモのアオの由来は雨上がりに樹皮が緑青色になること、枝を水に浸けて暫くすると水が青い蛍光色になること、高級感を出すために黒墨に加えて青墨を作るための着色剤として利用されたこと、青い染料に利用されたことによるといわれる。

日本では木製のスポーツ用品の材料、とくに野球で使われる木製バットの原料として知られ、他にスキー板やテニスのラケットなどにも使用され、日本でのバット材としての需要は年間20万本以上あり半数は輸入材で国産材のほとんどはアオダモである。計画的な植林・伐採が行われなかったことから、バットに適した高品質な材の確保が困難になっている。

2000年には行政、野球関係者、バット生産者が一体となってアオダモ資源育成の会が発足、資源を確保するための取組が行われている。

枝や樹皮は、染料として使われた。アイヌでは黧（いれずみ）をするときの消毒に用いた。

また、樹皮は民間薬としても利用されたこともある。主な成分はクマリン配糖体で消炎解熱作用、止瀉、利尿作用や尿酸を排出する作用があり痛風・結石の治療などの効果があるとされる。

天秤棒、輪標（わかんじき）などの器具材や機械材、家具材としても使われる。建築材として床柱などにも使用される。資源の枯渇とともにこれらの用途は減少している。

生木でもよく燃えることから猟師が薪として利用した。

## アオダモ 樹高

